



小児がんセンターたより

小児がんセンター長新任のご挨拶

血液・腫瘍科の後藤裕明と申します。3月で退任された長場直子小児がんセンター長の後任を務めることとなりました。小児がんは、言うまでもなく、こどもの生命に関わる重大な疾患であり、治療法の進歩によりその多くが治癒するようになったとはいえ、多くの副作用をもたらさうる治療が必須であり、治療期間も長期に渡ります。発達途上にあるこどもの患者さんに対しては、成人患者さんとは異なる、身体・心理・社会的な支援が必要であり、小児がんの治療には、外科的治療や薬物療法のみではなく、多職種による診療や支援が不可欠です。小児がんセンターは小児がん診療に関わる多職種が、より効率よく、より有機的に連携するための組織として2015年に神奈川県立こども医療センター内に設置されました。よりよい小児がんの治療をめざし、組織が一丸となって努力をしておりますので、今後ともご支援をよろしくお願い申し上げます。

小児がんセンター長 後藤裕明

【セミナー・研修会などのお知らせ】

- 6月20日(水)栄養サロン
- 7月2日(月)小児がんセミナー

詳しくは、ホームページでご確認ください。

小児がんをもっと知って！

小児がんセンター市民公開講座を実施

平成30年3月3日(土)、TKPガーデンシティ横浜にて、第3回小児がん市民公開講座を開催しました。今回は、第3期がん対策推進基本計画で取り上げられている、思春期・若年成人(AYA)世代への支援について考えるために、治療の現状や課題等を中心に、医師や相談支援の立場よりお話を伺いました。

最初は、昭和大学藤が丘病院小児・AYA世代がんセンター小児科山本将平医師より、「思春期・若年成人(AYA)世代に対する小児がん治療と課題について」ご講演をしていただきました。AYA世代とはどのような年代を示しているのか、AYA世代のがん治療の現状と課題についてわかりやすくお話していただきました。

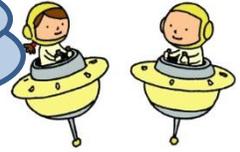
次に、国立がん研究センター希少がんセンター看護師の加藤陽子さんから、「思春期・若年成人(AYA)世代のがん患者さんの抱える問題と支援の実際について」希少がんセンターのこれまでの取り組みを通して、ご講演をしていただきました。AYA世代の患者さんは個別性が高いことからニーズをしっかりとらえ、個別の情報提供が重要と話されました。

最後に、当神奈川県立こども医療センターの小児がん相談支援員で看護師の竹之内直子さんから、「思春期・若年成人(AYA)世代の小児がん患者への支援と課題について」話しをしてもらいました。病院でのAYA世代への取り組みと、高校生への学習支援の重要性を話されました。詳しくは当施設小児がんセンターのホームページで実施報告をご覧ください。当日の資料やアンケート結果がご覧になれます。





小児がん相談支援室 情報コーナー



小児がんの患者さんの中には、思春期世代の患者さんもうらっしゃいます。昨年10月に策定された「第3期がん対策推進基本計画」の中でもAYA（Adolescent and Young Adult）世代のがんへの診療体制について示されています。この世代のがん患者の割合はとても少なく、医療や療養生活などの体制が十分ではありません。進学・就職・結婚・妊娠などライフイベントもたくさんある一方で、病気の治療や、また治療を体験したことで起こる影響により、困難や課題があることも多く、それに対する社会資源、サポート体制が求められています。

この世代にどのようなサポートをしたらよいのか？と迷うこともあるかもしれませんが、自分がこの世代だったら何に困るか？を想像するとそこにヒントがあるかもしれないと、体験者から話を聞いたことがあります。こども医療センターでは、高校生の入院患者への学習支援や、晩期合併症を抱えた体験者の社会生活への支援体制について、少しでもよくなるように、地域・社会と連携しながら進めていきたいと考えています。

小児がんに関連したご相談は

「小児がん相談支援室」（本館1階7番窓口）までご連絡ください

時間：平日（月～金）8:30～17:15

相談方法：面談・電話・メール

電話：045-711-2351 E-mail：shounigan@kcmc.jp

各部門からのお知らせ

～血液・腫瘍科の紹介～

血液・再生医療科はこの4月より、血液・腫瘍科に科名を変更することになりました。わたしたちの診療科では小児の血液疾患や悪性疾患に対する、骨髄移植をはじめとした造血幹細胞移植に従来から積極的に取り組んでおり、造血幹細胞を用いた治療も再生医療のひとつであることから「再生医療科」を科名に取り入れておりました。しかし様々な幹細胞を利用した他の再生医療が行われるようになった昨今、従来の科名では診療内容を正しくお伝えすることが難しくなり、この度の科名変更を決断するに至りました。科名は変更しましたが、小児血液疾患や悪性疾患（小児がん）に対する内科的治療、造血幹細胞移植を中心とした診療内容そのものに変更はありません。

白血病のみならず、小児がんの多くは、診断時に遠隔転移を有するなどの理由から薬剤を使った治療、化学療法を必要とします。わたしたちは小児に対する化学療法の専門家として、ほぼ全ての小児がん患者さんの診療に携わります。神奈川県立こども医療センターは日本小児がん研究グループの参加施設であり、小児がんに対する標準的治療の確立を目指す臨床試験に参加する一方、

現時点では標準的な治療法が見出されていない難治疾患に対しても、複数の診療科で協力し、工夫をしながら、新しい治療に取り組んでいます。小児がん診療に関するご相談には幅広くお応えしておりますので、お問い合わせをいただければと存じます。（後藤裕明）

